◇巡検の記録◇

東海地方巡検（10月3日～10月6日）

初めにバスあり。バスは巡検と共にあり。バスは巡検なりき。10月3日8時に学校に集合。8時半，出発。東名高速道路に入る。車窓観察をしながら西へ西へ。最初の下車地点である，洶陵丘陵に坐します中井パーキングエリア。まもなく酒匂川平野を臨み，津夫良野・吾妻トンネルを過ぎれば，富士山麓である。御殿場市で，下界に降り，東麓には珍しい溶岩洞穴まで歩くこと数分。この駒門風穴は流動性大の玄武岩質溶岩で形成されていて，頭上には溶岩鐘乳石が垂れ下がる。次は愛鷹山の裾野から駿河湾沿いに，浮島ケ原方面を臨む。浮島ケ原はその地名が表わす通り，沿岸砂州による潟湖が埋められた湿地帯である。湾沿いの山裾を更に西へ向かうと，吉原そして富士市。富士川の右岸から富士川の流路，古富士泥流丘陵を遠望する。由比山地の地すべり・崩壊地形や清水市を車窓観察。静岡市東方の登呂遺跡では弥生中・後期の微高地上の住居跡と，後背湿地の水田跡とが隣接している。ここで待望の昼食。その後，日本平の隆起に伴なって海食崖を成している久能山の南側では，高名なる石垣イチゴの栽培を見る。農家の人の説明には，質問の矢が飛ぶ。国境でなく，短い日本坂トンネルを抜けると，そこは大井川デルタ平野であった。牧ノ原台地が前方に。この礫層に見る地形の逆転現象で残った台地原面上にはおしなべて茶畑こそ居れ。小笠山丘陵を越え，磐田原で初めて黒ボク土壌にまみえた。三方原では，徳川・武田の戦い済んで日が暮れる。浜名湖畔で宿泊。

二日目。三ケ日原人の遺跡へ行く。この曽ての石灰岩採石場も，現在では発掘場が残っているのみで，化石は，他の地に移されていた。三ケ日駅でバスと別れ，バスは東京へ向かった。午後は，雲垂れ込め，しばし小雨の降る中を猪鼻湖西岸沿いに尾奈駅迄自由に徒歩観察。槇の木の防風林や鰻・牡蠣の養殖等珍しい事ばかり。聞き込みに皆余念がなかった。夕方，名古屋・四日市を経由して津市南部泊。

三日目。貸切バスで津市郊外の真宗高田派の本山である専修寺とその寺内町を見学する。家屋の造り・配列に昔の面影を留めている。次に一身田の新旧両試験場に行く。沿革・現状・将来の課題の説明の後，見学。新試験地は未だ整地の段階の部分が多く，茫々として砂ぼこりが舞い上がり，人けも無い。それから，伊勢湾岸の埋立地に建設された日本鋼管造船所へ行く。先ず，教育棟の一室に通され造船所の立地・歴史・構造に関する映画を見せてもらう。バックミュージックのトランペットはもの哀しい音色を奏でて，次第に子守歌ともなった。この後バスに乗ったまま見学。この造船所の特徴は，両開き式ドック・組立工場の配置により能率が高く，時間が短縮出来る事である。前日と同じ宿に戻ってみるとこの夜は凶器なるものが出没し，稀には蒲団蒸しの洗礼を受ける者も出た。

四日目は，最後の地点の志摩半島の真珠養殖場へと向かう。観光船に乗り英虞湾内を回った。お昼過ぎ解散。

最後に，終始時間にルーズであった私達に常に寛大で，他方懇切丁寧に指導してくださった先生にお礼を申し上げたい。加えて，前期試験直後だった事もあって予習もせず，四日間狐につままれていた，とは不勉強な学生の言である。　　（浅海先生指導　1年　蔭山美千代　嶋ゆう子）

那須・塩原巡検（7月12日～15日）

待望の夏休みを迎えて，すぐ，私たちは，東京を脱出し，栃木北部をめざして，巡検にのりこんだ。テーマは，海抜高度の上昇に伴う営農類型の変化，平地村から山村までの生活様式の変化と，農村景観の観察であった。

12日小じんまりとした町並の西那須野は，雨であったが，公民館長のていねいで，熱のこもったお話しは，何よりの歓迎であった。那須扇状地の開拓の歴史と，現在の状況をうかがったが，三島通庸，松方正義などの明治の豪傑の名前がでてくるだけで，歴史の一舞台となったのだなと，当時の開拓の模様が，さまざまに想像された。しかし，ねこの目農法で，日本列島改造論のあおりをうけて，大変だともおっしゃっていた。午後は，生憎の雨で，戦後開拓の日の出町には，行けなかったが，千本松農場の酪農と，この地を潤おす役割を果した那須疎水の見学を行った。この日，温泉町の塩原に宿泊。

13日朝のすがすがしさの中，大沼まで縦走。久しぶりの山歩きで疲れたが，トチの木の美しさと，数知れず，飛びかうトンボが印象的であった。巡検ならではのハイク，しかし，友は，早く人家が見たいとさわいでいた。新湯近くの山すそでは，観光農園がみられた。午後は，鶏頂山開拓村へ向かった。農家20戸が100haの土地で，機械を導入して，大規模に，高冷地農業を行っているところ。大根，白菜など，幾種かの蔬菜栽培を行い，近年は，人手がかかるが，軽くて，効率のよいホウレン草栽培が中心であるとの事だった。24年には，10戸が入植し，多少変動しつつ，現在に至っているが，整地から，収穫までの多種の機械，冷凍室の設備など，投下資本が大きいのに驚いた。高冷地蔬菜にかける意気込みが感じられた。しかし，土壌の整備，労働力確保など，やはり，問題となっていた。又，日常生活面，子供の教育機関の不都合さも，大きな苦労であるようだった。

14日午前中は，開拓村の土地利用調査を分担して行ったが，よく食する野菜も，苗や，双葉のうちでは，見わけるのが，なかなかの難事業であった。朝早くから，せっせとみなさん働いて，大変だなと思ったが，土とともに生き，手応えのある労働だと感じた。鶏頂山には，野ばらがよく似合う。

バスは，長い長い距離を走り，深く深く，山合いに入り，五十里ダムを下にみて，2時間ぐらいして，ようやく野門に着いた。ここは，平家の落人部落というキャッチフレーズで，近年民宿を始めた所だった。狭い山あいに，18軒の家と，社が，ひっそりと，ほんとうに，社会のわずらわしさから取り残されたように，たたずんでいた。民宿も，鶏頂山のスキー客目あての新しい宿泊施設と異なり，茅ぶきの昔ながらの大きな家を，そのまま利用した，素朴なものだった。夜は，御主人に生活の変化や，養蚕，狩猟などの生業の変化について，いろいろお聞きした。この夜は，親睦を深めるための宴があったが，きびしい巡検の中，一時くつろげて，楽しかった。